

小学校の現場で感じたこと

— 副担任としてのささやかな実践 —

齋藤 美和

銀髪の美しい故川崎千束先生と出会ったのは、三十年前のことである。先生の著書『さわらび』（フレール館 一九八〇年）を読んで、また先生と同じ園で働く機会を得て、私も先生のように、銀髪になるまで、保育者として実践したいと願ったものだった。そして、子どもにとっても大人にとっても「幸せな保育」とは何かを求めて、夢中で子どもたちと生活した。

家庭の事情で、七年前にやむなく現場を離れたが、子どもたちとの生活が忘れられず、居住地のN市で、小学校一年生の副担任制度を発足させることを知って応募した。子どもの気持ちに寄り添い共感し、子どもと共に生活する幼児教育の場と、子どもに教えることを優先させる学校教育の場という大きな違いはあっても、子どもにとって何が大切なのかを考えて接すること

とができるなら、幼稚園での経験が、学校教育の場できっと生きるはずだ、と考えての応募であった。

四年ぶりに接する子どもたち。学校生活初めの一歩で、子どもたちがつまずかず、スムーズに歩き出せるようにとの配慮から「副担任」制度は発足した。

しかし、実際の小学校の先生たちが願っていたのは「少人数学級」の実現だ。先生たちしてみると、教室の中に他の人が入ってくることはあまり歓迎しないこと。それは、幼稚園で担任をした経験のある私にも理解できる。自分の教育の意図を理解して入ってくる人ならいいが、そうでなければ、一寸厳しい指導をする、「何で……」と思つて子どもをかばつてしまふかもしれない。また、子ども一人ひとりで状況が違うので、指導の仕方も一寸ずつ変わってくるが、それが第三者には理解してもらえないこともあり得る。私自身が担任をしていて、教育実習生を受け入れた時には、こんなジレンマを感じる場面がいくつもあつた。しかしこの思いは、大人側の狭い発想で、子どもに

とつては、いろいろな見方をしてくれる人がいる、ということとはとても幸せなことではないかと思う。

私が配属になった小学校では、一年担当の先生方が、副担任を快く受け入れてくださったので、スムーズに仕事を始めることができた。小学校では、三年間副担任として子どもたちと生活した。

その時の子どもたちとの実践のいくつかを、ここに紹介したい。

丁男とのかかわり

T男は、読み書きがまだ十分ではない。ひらがな表の順でないと読み方や書き方がわからず、そのたびに表を見ながらなので、作業も遅くなつてしまう。教科書をうまく読むこともまだできないが、読みたい、書きたいという気持ちは強く、発言しようとの意欲もある。

しかし、家庭では父親が違う赤ちゃんの世話に母親が忙しく、また、入学前には「虐待」の相談も受けて

いたと聞いた。そんな状況での家庭は、彼の勉強への意欲を援助できるような環境ではなかった。私は、そんな彼の気持ちを汲んで、一緒に音読に取り組んだ。

音読の宿題が出た時には、カードに題名を書けないので、家でやってくるのができなかった（音読カードに自分で題名を書いて、家の人にチェックしてもらうことになっていた）。そこで、私が彼の読みたい単元の題名をカードに書くことにした。翌日「せんせいみてー」と、母親がカードに◎を付けてくれたところをうれしそうに見せてくれた。休み時間には、たどたどしくではあるが、教科書を読んで聞かせてくれた。今後の学習活動に、どんな効果をもたらすかはまだわからないが、やりたいという気持ちを後押しできたことはとてもうれしいことである。

Ｔ男については、担任の先生も配慮していた。彼は「虫博士」と友達があだ名するほど虫のことに詳しいのを、ちゃんとつかんでいて、音読のテストをする時

には、彼には虫の教材を扱った「だれだかわかるかな」の単元を読ませたりした。彼の家庭の状況についても、副担任にもきちんと話して、一緒に子どもを育てていこうとの姿勢が感じられて、私も大変に動きやすかった。

M子とのかかわり

二学期後半になると、算数では繰り上がり、繰り下りの計算になって、理解の早い子と遅い子で、大きな差が出てくる。M子は、何事にもスローテンポで、算数の五十問プリントをするのにとても時間が掛かっている。理解していないわけではないが、取り掛かりが遅く、時間ぎりぎりまで掛かって取り組んでいる。自分から「わからないからおしえて」と話すことは無く、この日も机間巡視をしていると、通り過ぎた時に、服を引っ張って目で訴えてきた。そこで、一つずつ問題を指で押さえて、「ハイ、これ」「ハイ、次」と問題を示してやると、自分で計算し、答えを書き始め



▲ぼくらの かいけつゾロリ

りする。力も強いので、彼を恐れて近づかないようにする女の子もいた。しかし、全く勉強したくない訳ではなく、たとえば、音楽の時間にピアノカを演奏する時には、弾きたい気持ちが感じられたので、私が鍵盤に階名のテープを貼ると、一生懸命吹き始めた。

彼のできるようになりたいという気持ちを探して、励ましや援助を続けていたが、困ることをした時には、どのように話したらわかってもらえるのか見当がつかず、悩むことが多かった。

担任は、クラスの保護者からもたくさん苦情を受けていた。「隣に座らせないでほしい」「同じ班にはしないでほしい」など。困ることをした時、担任はいつでも彼に優しく「Tちゃん、せんせいとつてもかなしいな」と話して聞かせていた。遅れていた学習に、放課後、時間を割いて付き合っていた。優しい愛情を受けたことの無い彼に、時には叱ることもあったが、決して突き放すことなく優しく接していた。そんな担任

を、私は菌がゆく思ったこともあった。でもその時の彼には、あくまでも優しい愛情が必要だったのだろうと今は思う。

私もまた、彼の学習を何とか援助しようと努力してきた。みんないい子になりたいし、勉強ができるようになりたいと思ってるのだ。悪い子になりたいとは誰も思っていないのだ。

私は、厳しさと優しさのバランスの大切さを、この担任の先生に教えていただいた。

「ミワセンセイてさ、どうしてそんなに

いろんなことしってるの！」

作品展では、幼稚園での経験を生かして「指人形」作りに取り組んだ。

導入から、作業の全過程を主になって指導することになり、子どもたちの前に立った。幼稚園の現場で幼児と共に作ったものを、一年生の発達に合わせて方法を変えて指導した。

自分だけの人形を作れることを、子どもたちはとても喜んで、一つひとつの説明を熱心に聞いてくれた。人形の頭に和紙を張る作業は、単調な繰り返しではあったが、徐々に形が見えてくると、やり遂げることの充実感を味わうことができ、生き生きと取り組み、前述のようなうれしい言葉を口々にかけてくれたのだった。

子どもたちにとつての副担任は、困った時「センセイ」と助けを求めたり、我がままを言え、甘えられる存在だ。しかし、子どもの自立を願うなら、子どもに慕われる心地よさだけに安住してはいけないと痛感した三年間であった。このような難しさもあったが、自分なりに、幼稚園での経験を生かして、うまく担任との連携を図り、教育活動にかかわれたのではないかと思ってる。

今は、機会があれば、子どもとかわる現場に戻りたいと願っている私だ。
(お茶の水女子大学)